

夫婦の「ミニユニケーション」



はいの
唄野 絢子
あいの

先月号で、大阪府堺市の佐々木文吾・優子夫妻の出会いについて紹介しましたが、優子さんのお母さまの唄野絢子さんは、家庭・夫婦の問題について長年講演と執筆活動を続けておられる方です。

今回は、唄野絢子さんがどのようなにして夫婦問題に関心を持つようになり、またどのようにして学び、教えるようになったのかをうかがいました。

「大事なことが 見えつけない」

「唄野さんが夫婦問題について学び、また教えるようになられたのは、何がきっかけですか。」

唄野 1977年、私が39歳の時、初めて他の教会から招かれて証しをしました。最後の質問の時間に、「うちの教会の若いカップルはとてもケンカが多いのです。どうすればケンカをしない仲良しの夫婦になれるのか、秘訣を教えてください」と聞かれ、困りました。

どんなに知恵を絞っても何も出てこないのです。苦し紛れに

私は、「ケンカするのに、時間がかかるでしょう。私たち、ケンカする時間、なかったのです」誰の助けにもならない答えをしたとたん、私には大事なことがまだ見えていないということがはつきり分かりました。

いったい何なのだろう。主は、私の内側にこの求めを呼び覚まし、それに応えようと待ち構えていてくださったのです。

実は、私は学生時代に「聖書の結婚観」を聞き、天が開けて御国の空気を初めて吸った経験を作せていただきました。

結婚してからずっと、主人と一緒にKGK（キリスト者学生会）に関わり、学生たちに「結婚」の分科会で話す機会を与えられてきていました。この経験は「人はその父母とを離れて、その妻と結ばれ、ふたりの者が一心同体となる」という私が生涯かけて教えられることばの深みが開かれていく次のステージへの主の招きだったのです。

深い愛のまなざし

「唄野さんの著書には、ハンス・

ビュルキ、アゴ・ビュルキ夫妻のことがよく出てきますが、このご夫妻との出会いはどのようなものでしたか。ビュルキ夫妻の魅力とは何ですか。」

唄野 初めて我が家において下さったのは、ハンス先生おひとりででした。アゴ先生との出会いは、1978年、私どもがヨーロッパ旅行の途中、スイスの先方のお家に3泊4日、お世話になった時でした。

最後の日、ハンス先生は自分の山の隠れ家に連れて行ってくれました。ここに身を置いたとき、この静まりこそが私の魂が求めていたものであったと気づき、動けなくなりしました。ハンス先生と主人は、私の魂のうちに起こった出来事を優しく見守ってくれました。その後、先生のセミナーに十回も出させていただきました。

ハンス先生は、主の前に静まることは回心の時と同じほど大切なことであることを教え、また経験させてくださいました。統合された人となつて、つまり全人格的に神に応答していくように、少しずつ丁寧に導いてく

だしました。

著書『主の弟子となるための交わり』（いのちのことは社）を通して今も教えられ続けています。個人的な親密なお交わりをたくさん頂戴しましたが、その都度、まともに向き合ってくださいました。時には鋭い叱責のことばもいただきました。「あなたをそのようにつき動かしているものは何なのか？」と。

アゴ先生からは、夫婦のミニユニケーションのことを様々なエクササイズを通してたくさん気づかせてもらいました。また、著書『変わる妻たち』（新曜社）を通して、夫と妻とのかわりの世界を深く考えさせられ、いかに夫と妻の橋かけをするかを教えられています。アゴ先生の人間洞察の深さ、質問の鋭さには目を見張る思いでした。

ビュルキ先生夫妻の魅力は、人格を深く尊重し方であり、深い愛のまなざしです。

相手のことが 分かっている

「ビュルキ先生は、『全人格的出会い』『全人格的結婚』ということを教えられたそうですが、それは分かりやすく言うとういことでしょうか。」

唄野 ビュルキ先生ご夫妻によ

る日本で初めてのカッブルズ・セミナーで、先生は「結婚生活で一番大切なものは何だと思うか？」と質問され、「それは自由だ」と言い、コリント人への第二の手紙3章16〜18節を読まれました。

人が主に向くなら、そのおおいは取り除かれるのです。主は御霊です。そして、主の御霊のあるところには自由があります。私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたち姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。

何のことだか分からないままに、そのことは心に留まりました。

それから、次のような作業をさせられました。「配偶者とうんなことを話したいか」を考え、そのことを相手に話し、聞いた方がそれを自分のことばで言い直して復唱するという作業です。

やってみて驚きました。聞いていたつもりで相手の話を聞いておらず、相手のことが全く分かっていなかったことに気づかされたのです。結婚して16年目、私が40歳のときの経験でし

た。

この経験と先のコリント人への手紙のことばとがどのようにに関わるのか、長い間考えていましたが、その後、少しずつ目が開かれてきました。

人、つまり私の心が主に向くとは、人となられた神ご自身、イエス・キリストのご人格と私の人格が向かい合うこと、すなわち主にお会いすることです。イエスさまに聴いてお応えする、主との交わりが回復された者は、主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと主と同じ姿に変えていただくのです。そうしてくださるのは御霊であり、御霊による自由は愛の業をその実として結ばせてくださるのです。

夫と妻が向き合つて、互いに相手の言うことに耳を傾け、そのことを自分のことばでまた相手に伝えるとき、真の、そしてより深い理解が生まれることを学びました。これこそビュルキ先生の言う「全人格的出会い」「全人格的結婚」の意味だったのです。

一本の中で、唄野さんご夫婦が互いに誤解していながら、それに気づいていなかったという実例が出てきます。それをいくつかお話しください。

唄野 夫婦の関係が親や子との

関係、他者との関係に優先されるべきだということは頭ではよく分かってはいるつもりでした。ところがある日、主人が「僕が教会からの帰り道に『うんでも食べようか』と誘っても、絢子は百回も断る」と言うのを聞いて、ショックを受けました。「どうして？」と問い詰めていつて分かったことがあります。

私はいつも、子ども最優先ついで同居している両親への心遣い、そして、主人は……、私の同類項と置いて、「あなたも子どものお父さんでしょう、息子のあなたが両親を大切にするのは当たり前でしょう」という態度で、主人の感情や欲求に目を向けていなかったことに気づいていました。

もう一つ、夫婦で新幹線に乗ったときです。さつそくサンドイッチを用意してくれた主人に感謝したのですが、すぐ姿を消した主人がまもなく帰ってきた、「食堂車があった。スパゲティを食べに行こう」と言いました。あきれてしまい、「サンドイッチがあるじゃない」と言つて断りました。

そしてその日の話しの準備をしようとして聖書のエペソ書を開くと、「妻は夫に従いなさい」……。心にひっかかるけど、私は悪くないと思つていました。しかし、隣りからだだよう不機

嫌さに困り果て、「神さま。助けてください。うまくいっていません」と祈つて、思い切つて謝りました。

主人も「こつちこそ」と言い、「前に新幹線に乗ったとき、食堂車でスパゲティを食べたことがあり、おいしかったので、絢子に食べさせてやろうと思ったんだ」と話してくれました。わけが分かり、「それなら行こう」と出かけたのですが、行つてみたら、売り切れていました。

両方が勝つケンカ

「それは残念でしたが、とても分かりやすい例ですね。ところで、ビュルキ先生から勧められた『夫婦ケンカのルール』とはどういうものですか。」

唄野 「夫婦ケンカはふたりのミニユニケーションを深めるためのもので、そこにはルールが必要だ」とビュルキご夫妻から教えられました。それをご紹介します。

- ①夫婦ケンカは、お互いに用意ができたときに始めること。「この話題で話し合う」という同意を得てから始める。
- ②両方が勝つケンカ、つまりケンカの結果、互いをより深く理解することを目指す。相手を言い負かすためでは

ない。

- ③一回の発言は相手が復唱（リピート）できる長さでまとめる。それは相手に自分の言うことを理解してもらうためだが、感情の高まりを抑えるという意味もある。
- ④聞いた方は相手の言ったことを自分のことばで表現し直し、復唱する。
- ⑤復唱したことが、相手の本当に言いたいことであつたかどうかを確認する。違つたら復唱し直す。自分の言ったことを相手が正しく理解したことを知るために。
- ⑥確認できたら、次に他方が話す。もちろん反論もOK。
- ⑦会話の中でどんな小さなことでも新しく気づいたことは評価する。例えば、「あら、そんな意味だったの」とか「ふーん、そんな気持ちだったの」

たとは初めて知ったよ」など。

このルールに従つて話し合うことによって、私は、波風を立てないのがよいとか、ケンカはない方がよいとかいう幻想を打ち破られ、きちんと向き合つて語り合うことが、相手を知るために、自分自身の姿に気づくためにも、どんなに大切なことを経験するようになりました。実は、生ける神さまとの関係も同じだったのです。

「この通りにできたなら、夫婦ケンカではなくて、まさしく建設的なディスカッションですね。私のところでも、そんな対話はこれまでにしてこなかったような気がします。」

今回は、お忙しいところ、本当にありがとうございました。（構成・前島常郎）



いのちのことは社発行、127ページ
定価 1,050円(税込み)
*本書は、ファミリー・フォーラム・ジャパンで扱っております。